

「消化管の病理と生検組織診断」

中 村 恭 一 筑波大学教授 著
喜 納 勇 浜松医科大学教授

九州大学教授
遠城寺 宗 知

本書を手にしてみて、全くすばらしいと嘆声を上げざるを得ない。本当に望んでいた書物という気がする。

消化管生検による組織学的検査は今や消化管疾患の診断には欠くことのできないもので、ほとんどの病理医がこれに携り、多くの臨床医がこれに関与する。私たちの機関では、多少特殊事情はあるが、毎日行われる病理組織診断の70~80%が胃を初めとする消化管生検材料に対してであり、すべてがたやすく処理できるとは限らない。

本書は消化管生検の実際面とその基礎に関する集大成である。食道から肛門まで消化管の全長にわたり、正常構造を述べたうえで、各部にあるべき疾患を網羅し、いつも遭遇する疾患については詳しく扱われ、実際に起こってくる問題点が細かに指摘されている。例えば胃で癌と紛らわしい病変・非癌と紛らわしい癌は

標本作製上の人為的失敗のケースまで含み、微に入っている。診断担当者がいつも悩む重要な問題“Group II か Group IV か？”に対する解説も親切である。

長年この道に携ってきた両著者の極めて深い経験と頭の鋭さを物語るごとく、記述は理解しやすく、かつ読者を十分に納得させるものである。またふんだんに取り入れられた写真はほとんどが両著者の原図であり、適切に引用された内外研究者の成果と所信が加わって、実に生き生きとした本書のムードが醸し出されている。

蛇足ながら著者の中村恭一・喜納勇両氏はそれぞれ癌研究所と東大病理で消化管病理の経験を積み、永く中堅として新分野を開拓したが、今や両氏とも教授としてこの道の最高指導の立場にある。両氏の師に当たる太田邦夫（東京都老人研所長・前東大教授）・菅野晴夫（癌研所長）両泰斗

の序文も本書をいっそう権威あるものとしている。

著者らは、病理組織診断学が幾何学や絵画観賞と、パターン認識を手段とする点で同じであり、論理的と直感的な両面を持つと言う。そうであれば、日常、責任ある診断に携わるには、各種疾患の形態像を熟知しておく必要があり、そのよって来たる論理を知らなければならない。特にごく小さい切片から病変の全貌を判断する消化管生検では不断の研鑽が必要であり、本書の伴侶としての意義が生じる。

病理医には初心、老練を問わず座右の書としてお勧めするのはもちろんであるが、消化器専門の臨床医家にも御一読をお願いしたいものである。病理医の提示した Group 診断に基づいて、病気を診断し、患者を治療するのは臨床医だからである。

B 5 頁346 図22 写真465 原色図24
1980 年 ¥15,000 千300 <医学書院刊>